
消えた友人

きーち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消えた友人

【Nコード】

N3904W

【作者名】

きーち

【あらすじ】

あれっばいホラー小説4

その時の私は、今後の進路を決め兼ねていた。大学入試を終え、無事、志望する大学への進学が決定した私にとって、今後の進路も何も無いと思われるだろうが、私の悩みはそれとは別にあつた。

というのも、私はここ数年で本来、人間がその人生で体験するはずも無い事を、何度と無く体験してきたのである。それは、私にとって恐怖でありトラウマでもあつた。そのせいか、私は未知という物を極端に恐れる様になつた。

しかし、今後、自分の希望通りの進路に進むとなると、どう考えても、一人暮らしと言う物をしなければならず、この見知つた町から、まったく知らぬ場所ですらすという恐怖に対してどうすれば良いのか考えていたのである。

結局、私は町を出る事を選んだ。どういった考えの下であるかは、種々あり、すべてを書く事は出来ない。ただ、私を襲う恐怖が、この町を起因として起こっていると考えた事が理由の一つであつたと伝えておく。

つまり私はあの町から逃げたのだ。闇はどこにでもあると言つのに。

新天地にて新しい生活を始めた私は、まず部屋探しから苦勞する事になる。一般的な観点から見ても、良いとされる物件に、過去において、不可思議な事が起こっていないかどうかまで調べる必要があつたからだ。

苦勞の甲斐が有つてか、探し抜いた部屋は大学にも近く、なににより新築で見るからに健全な雰囲気を漂わせている。

一方の大学であるが、とある都市の中心地に位置しており、人工的な明るさが広がる町並みの中では、怪異など送るはずが無いと私は考えていた。

ただ、不安であったのはこの大学の歴史である。戦前から存在するその校舎は、私が想像する怪異と縁が深い物に見えるのだ。

だが入学後、暫くは心配する様な怪異と出会う事は無かった。そうして何事も無く過ごしていれば、自然と学友が出来る。

私にとつて、この町は見知らぬ土地で、その彼も同様であつたらしい。新天地での不安から次第に仲が良くなつて行つた。

そんな彼に対して不満な事は、オカルトに興味があると言つ点であつた。彼は大学に入ると同時に、大学でそういったサークルが無いか調べて回つたらしく、その名の通りオカルト研究室と言つサークルを見つけたそうだ。

そして問題は、そのサークルに入る際に、私も共に入つてくれなしかと誘つてくる事だつた。彼は一人でそこに行くことに及び腰であり、私の一緒なら、なんとかかなると言いながら、何度もその会への入室を迫つてくるのである。

勿論、そんな物とはもう縁を切りたかつた私は、誘われる度に断つていたが、終に根負けして、名前だけという約束でその会に参加する事になつたのである。

結局、参加する事になつたサークルは、思つたよりも明るい雰囲気、部員も何人かが既にサークル室で寛いでいた。

私と友人がそこへ入ると、当然それらの視線はこちらへと向かつてくる。友人が、このサークルへ参加希望の意思を示すと、その中の一人が率先して私たちに参加用の用紙を渡してき来る。

私たちが、そこに記入事項を書けば、正式にこのサークルに加入したと言つ事になるのだらう。

その後は特に何かあつた訳では無かつた。自己紹介から始まり、雑談と、自分がした恐怖体験に続く。私は本当に体験した事を話す訳にも行かず、それなりに聞き覚えのあつた、当たり障りの無い話をアレンジして話したが、それが作り話である事は、詳しい人物であればわかつて居ただらう。

気になつたのは友人の体験談であつた。彼の話す体験談は、今も

続いているという話から始まる。

友人は昔、神隠しにあったそうさ。まだ友人が小学生だった頃、彼は公園で当時の友達と遊んでいたそうさ。公園はどこにでもある平凡な物で、砂場にすべり台、ジャングルジム、ブランコ。他の公園にある物が一通りその公園にもあったらしい。

その時の遊びの内容は隠れんぼ。結構な大きさがある公園らしく、子どもがそうやって遊ぶのには十分な広さがあるのだろう。

友人はその時、隠れる側であり、すべり台の昇る側に隠れた。そこは子どもが楽しめる様に階段で昇る部分からすべる部分まで、外側を小屋の様な物で覆っており、すぐに隠れる事が出来た。この構造は公園で遊ぶ子ども達の間では好評で、友人は隠れんぼでも、この人気のある場所に隠れたいと思っていたのだそうさ。

その小屋で隠れながら、鬼が見つけてくれるのを待つ。その時の事である。小屋の中に自分以外の誰かが居る。なんとなくそう感じたそうさ。小屋と言っても、子どもを少し楽しませるための小道具に過ぎない。だから、首をちょっと振る程度で、他に何か居れば見ることが出来る。友人もそう思い当りを見回した瞬間、影が笑ったそうである。

友人はそこまで語ると、少し怯えた表情をする。サークル部屋の住人が続きはどうなると急かす中、友人はここで一旦終わりであると話す。なんでも、そこから先は記憶が無いそうさ。気がついた時、自分は公園の真ん中で立っており、家に帰ると、親が泣き顔で飛び付いて来たと言う。

友人は1週間程、行方不明になっていたそうさ。どこに行っていたのかと親や警察が話す中、友人自身はその記憶が無い事と影の話をしても、周りは誘拐されたショックでそういう記憶を作りだしたのだろうと結論付けていたそうさ。

友人が話を終わると、別のサークル部屋の住人が、それが何故、今も続く話なのかと友人に聞く。友人は怯えた表情のまま、実はその誘拐された時の記憶が最近になって戻ってきたのだと言う。

最初は夢だと思つたらしい。夢の中で友人は、先ほどの話と同じ状況居る。そして隠れんぼで、すべり台の小屋へと隠れる所も一緒であった。だが、影が笑う瞬間は、それまで覚えていた光景よりもさらに先に進んだ物であつたらしい。というのも、彼は影が笑つたという瞬間を、その字面で覚えていたらしく、それがどういった物であつたのかを良く思い出せずに居たそうだ。だが、夢の中の光景はより鮮明に、その瞬間を映像で見せてきたと言う。

その瞬間とは、文字通り、小屋の中にある影がグニヤリと歪み、笑みの形になる光景であつた。

夢はそれまでだつたそうだが、友人は、それを自分が誘拐犯の姿を恐怖で捻じ曲げて記憶した物では無く、確かな記憶であると語る。サークル内ではその友人の語りに飲み込まれる様に静まり返る。

そして友人は、もう少して、それから先の事を思い出せそうで、いつかその時の事を完全に思い出したら、誰かに語りたいと考え、サークルに参加したと話す。

友人の語りが上手かつたからか、サークル室は一瞬の静寂に包まれたが、すぐに友人への質問が始まつた。

思い出せたのはそれだけか、今も徐々に記憶は戻っているのか、本当にそういつた事件があつたのか、作り話では無いのか。

そういつた種々の意見に友人が答えている内に、時間は過ぎ、今日はそろそろ解散しようと言う雰囲気になつた。

私は友人に付き添つたのみであり、再びここに来る意思は無かつたのだが、解散する際にサークル員たちは、ここにまた来てくれると嬉しいと言つた事を私たちに話すので、少し罪悪感があつた。

顔を出す程度なら、また行つても良いか。そんな事を家に帰つてから考えていた頃である。

私の携帯電話が振動した。誰からの電話なのかと画面を見ると、大学から家に帰る途中に別れた、友人からであつた。

何かあつたのだろうか。私は電話に出ると、友人が興奮した様子で、思い出したと叫んできた。いつたい何の事かと聞いていると、

サークル室で話した、自分の記憶に関する事らしい。

友人はサークル室で、自分の記憶を話してから、より一層、昔の状況が鮮明に思い出せる様になったそうだ。

その記憶とは、影が笑みを浮かべる瞬間から始まる。友人の目の前で笑みの形に変化した影は、次に、笑みから触手が伸びる様に友人に迫ってきたそうだ。

友人は、その場から逃げようとするが、何故か上手く動けない。何故かと思い、足を見ると、小屋中の影という影から、同じ触手が友人の足へと伸びており、その影に絡め捕られている様に、足が地面から離れなくなっていたのだ。

友人へと絡みつく、影の触手は益々多くなる。そして絡みつく触手に触れている友人の体は、なんとというだろう、影の同じように黒く変色していたのである。

友人は恐怖と混乱で、叫び声を上げようとしたが、それは不可能であった。何故なら、その時、既に友人の声帯までもが、影と同質化しているのだから。

友人の話を聞く内に、私までもが、恐怖に震える様になった。友人も一緒だったのだ、私の同様に、闇に潜む者と出会っていた。気も合はずだ、彼と私は同様に被害者であったのだから。

その後はどうなったのか。私は話の先を聞くと、友人は、恐らく影と完全に同じ物になったのだろうと話す。だから、再び、公園へと戻るまで、その間の記憶が無いのだと。影となった自分は何かを記憶する事など出来ないのだから。

友人は話を続けている内に、声を聞くだけで分かる程、怯えていた。私は無理に話さなくても良いと伝えるが、友人は、もう少しで本当に思い出せそうだからと、話を続けてくる。

そこまで話せば、完全に思い出したのと同様では無いか。それ以上は辞めるべきだ。私は必死に友人にそう伝えるが、友人は、まだ完全では無いと叫ぶ。公園へと戻ってきた時、影に何かを言われたのだと。それを思い出さない限り、本当に思い出したとは言えない。

そう言いながら、友人は電話の向こうで何事かを呟き続けている。

私は、友人を止めるには直接会うしか無いと思い、友人の家へと向かう事にする。耳に携帯電話を押し付けたまま、玄関へと向かい、靴を履き、扉を開けようとした瞬間。

私は、友人の家がどこにあるのかを思い出せなくなっていた。いや、それだけでは無い。友人の姿も、今日の服装も、顔すらも、頭の中から消えている。ただ、友人の声だけが、電話の向こうから聞こえてくるのだ。

思い出したと、友人は電話の向こうで話している。何を言われたのか思い出したのだと、先ほどとは打って変って、感情がまったく籠っていない、単調な声で話し続けている。

いったい、何を言われたのか。私が電話の向こうに問うも、既にその電話は切れていた。画面を見ても、着信履歴すら存在していない。登録してあったはずの、友人の番号も、電話帳からは消失していた。

私は、その後の朝、友人に誘われて参加した、サークルの部室に居った。サークルの人間なら、誰か覚えているのでは無いかと、期待しての事であったが、私はここへ一人で来たという事になっているのを聞いて、彼が完全に消えてしまったのであると確信した。

友人は何故消えてしまったのだろう。私は今も考えている。彼は一度、影になり、再び人間に戻ったと言っていた。それはどういう事だろうか。

一度、影になった者が人間に戻るといふのは、何者かの意思を感じないだろうか。その意思が友人を一度、人間に戻し、そして、友人に何かを伝えた。

友人は、伝えられた通りの行動をした結果、再び影へと戻っていたのではと、考えられないだろうか。

友人が消える前に何をしていたのか。それは、私に公園での出来事を話すという物だ。友人は公園での出来事を思い出せれば、誰か

に話したいと言っていた。

だが、自分が体験した恐怖をそんなにも、他人に話したい物だろうか。私は自身の体験を誰かに話したいとは思わない。それは、再び、恐怖を思い出す行為だからだ。

しかし、友人はむしろ、それを思い出し、伝えようとしていた。つまり、友人は私に、自らの体験を話した結果、消えてしまったのでは。

私は、そこまで考えて、体が震えだすのを感じた。もし、友人がそのためだけに、こちらへと戻ってきていたのだとしたら、それを指示した影はなんの意図を持ってそうしたのか、誰かに自分達の行為を伝える事で何をしようと言うのか。

私はそれ以上を考える事は恐怖に繋がると思い、頭から振り払う事にした。今は恐怖する事よりも、友人が消えてしまった事を悲しむべきだ。今では顔も思い出せない、友人であるが、確かに私は彼に友情を感じていた。

私は、今も何度か、このオカルト研究室というサークルに顔を出している。何故なら、このサークルに誘ったのも、他ならぬ消えた友人の意思だったのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3904w/>

消えた友人

2011年9月4日03時40分発行